

先回のインタビューでマイク・エドワーズは、なせテクノ/ハウス色をより強調した「パーヴァース」を制作したのか、更に送り手である彼から見て、現在のポップ・ミュージック・シーンがどのように映るのかを仔細に語っていた。その語り口は実に情熱的で、矛盾点を含みながらも、主義主張の潔さは一貫していたと思う。実際、音楽を作り出す側としての動機とその路線選択への意志が、時に他アーティストへの辛辣な批評——彼のペンによる本誌連載「耳の冒険」——最新シングル・チェック」が充分証明している——と組になって迫ってきていた。

アーティストである以上、他アーティストの音楽への安易な同調は、自らが音を紡ぎ出す根源的な理由を無化させてしまう。そういう意味からも、マイク・エドワーズの歯に衣着せぬスタンスは、内容はともかく圧倒的に正しい。ただしそこにまっとうなミュージシャンシップは見えても、主義主張の細部には数多くの疑問があることも確かである。

《来日特集》超現在主義者の思考

マイク・エドワーズは ロックを捨てたのか？ JESUS JONES

これからは「エレクトリシティ、 ドラッグ&ビデオ・ゲーム」だ

過去を振り返ることを嫌い、未来に属そうともしない、ただ現在あるのみのポップ感覚。来日公演で見たテクノとロックの融合は、マイク・エドワーズが考える“今”の理想形か？

インタビュー●森田敏文 協力●川原真理子 撮影●小松陽祐/久保憲司(P.29)

そこで今回のインタビューでは、彼の意見に相反する事実や意見を揃え、直接彼にぶつけることにした。マイクが自説をどのように弁護するのが、またそこからこれまで抑えられていた彼の本音がどのような形で吹き出すか、それをじっくりみてみようというわけである。

その結果、こちらが予想もしていなかった発言、それこそ他のメンバーには絶対聞かせられない彼の極秘計画まで飛び出した。果たしてそれが実行されるかどうかは今のところわからないが、いずれにしても“モダン・カルチャー”の進行形としてジーザス・ジョーンズを位置づけているマイクにすれば、いつ決断しても不思議ではない。その計画をエゴと批判されようが、彼にとっては痛くも痒くもないはずだ。何しろそのマイクのエゴによってジーザス・ジョーンズは現地まで到達したのだから。

この先の展開は誰も予想できない。わかっていることは、マイク・エドワーズがテクノロジーと共に、いくところまでいってやろうという覚悟をきめていることである。

●今回のツアーのセットはアメリカン・ツアーの時とほぼ同じで、1時間10分というコンパクトなものでしたが、客席の反応をみたらファンはどれも物足りなかったようです。

「日本のファンがどうしてそんなに演奏時間を気にするのか未だに理解できないんだ。日本では質より量を重んじるのかという気にもなるよ。セットが以前より短くなったのは、一番パワフルで出来の良い曲を総て注ぎ込んだ結果そうなっただけで、やろうとすれば倍の時間だってできるさ。でもそういうもんじゃないだろう。これって曲作りと同じでね、何分の曲を書こうと思って書くわけじゃなくて、いい曲を書こうと思って書くんだからね。セットにしても長い時間かけていろいろやってみて、その結果これが我々にもファンにも一番いいということになって、それがまたま1時間10分だっただけのことなんだよ」

JESUS JONES

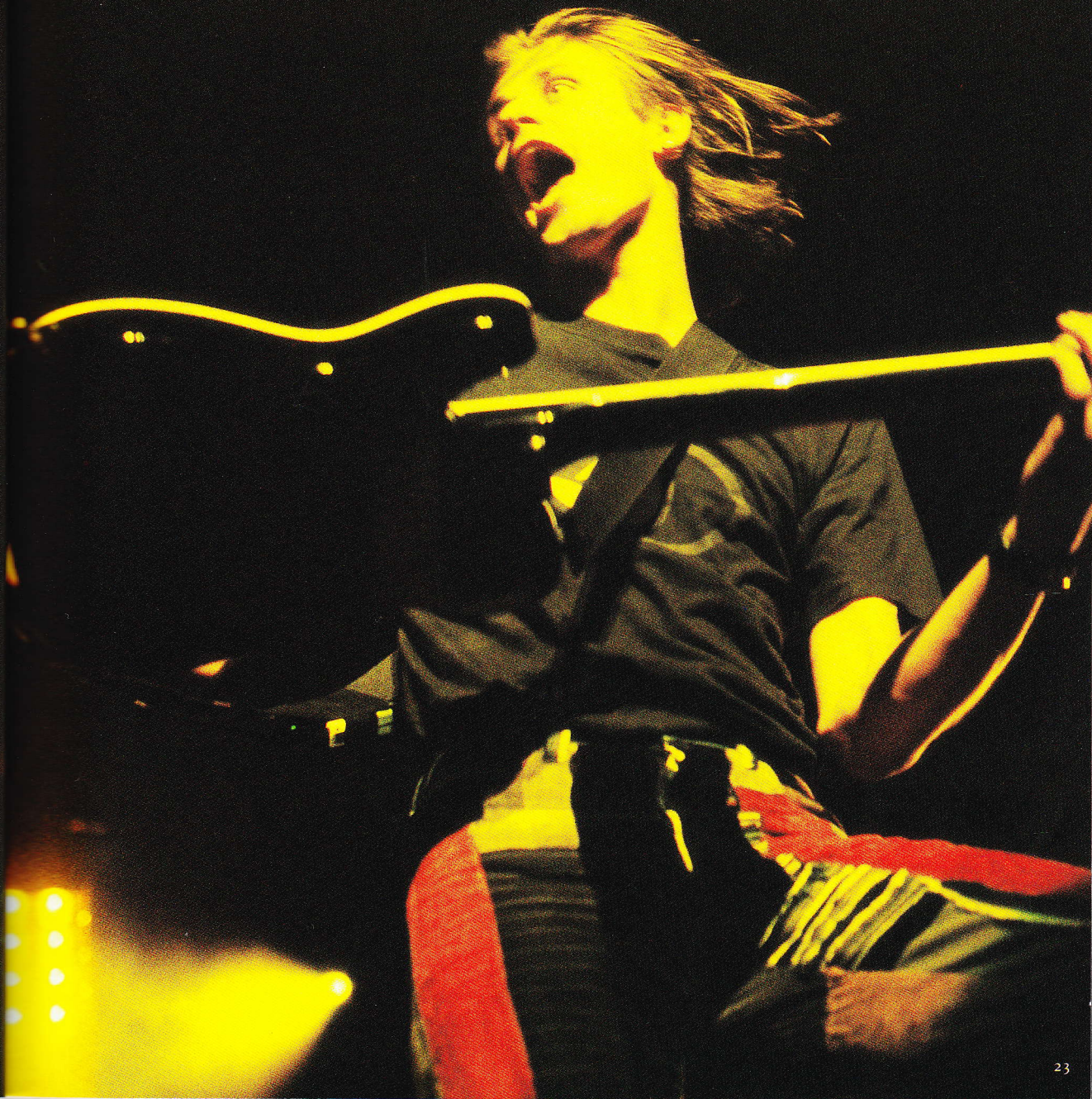
●アメリカン・ツアーも大成功だったと聞いていますが、自分でも納得できるものでしたか。

「ああ勿論さ。ニュー・アルバムは日本では売れてるけど、アメリカでは前作ほど売れてない。そんな国にまた行って、それでも毎回2千人の前でプレイすることができるんだから、納得しない方がおかしい。すごく嬉しかったよ。何も期待していなかったからなおさらだった」

●ツアーは毎晩同じことの繰り返しだから、創造的じゃないし消耗するだけという理由で嫌う人も多いですけど、あなたは全く苦になりませんか。「いやツアーは大好きだよ。なにせ僕は反対に、

ツアー中こそがクリエイティブな時間を持ったり、その気になったりできる唯一の機会なんだ。ステージでは多少のインプロヴィゼーションもやって自分達が飽きないようにしているけど、それよりもツアー中というのは結構ヒマな時が多いんで、いつもはできないことがいろいろとできるんだよ。音楽を聴いたり、本を読んだり、とにかくそういう秩序だった生活が好きなんだ」

●「パーヴァース」は世界的に言えば前作「ダウト」程のセールスをあげていませんが、音楽的成功云々は関係なしに、これをどう受けとめているんでしょう？



「アメリカでは確かにそうだったけど、アルバムの成功の基準というのはいろいろあるわけで、ビジネスの話はその中の一つに過ぎない。勿論『パーヴァース』が『ダウト』より売れていたら嬉しかっただろうけど、それはアメリカやイギリスの話であって、日本のように新作が1回売れた国もあるし、僕としては次に同じようなアルバムを作るのではなくて、自分の満足のいくものを作ることの方がずっと重要だったわけだから、そうは気にしてないんだ。『パーヴァース』のもつ内容からいくと、それほど売れないという可能性はかなりあると僕達も思っていたよ。でもある意味では売れなかったということが、その後のクリエイティビティに効果的な影響も与えているように思うんだ」

●その「パーヴァース」発表時に、あなたを音楽へ向かわせる動機の比率が、創作欲70%、成功への意欲30%とインタビューで言っていましたけど、それに変動はないですか。

「いや、すごくあったと思う。今回アメリカ、イギリス、日本それぞれの国における成功の意味を見てきた結果、もう成功というものにそれほど興味なくなってきたんだ。前ほど重要に思えなくなったよ。だから今は制作意欲が90%で、成功への意欲は10%だね。もともとそれが僕達に無理やり課せられているというわけじゃなくて、僕が成長してきた結果として、特定の国における成功というものの本質が難しくなってきたというだけのことなんだ」

●逆にビジネスを越えたところで、作品に対する自信がより強くなったということですか。

「そうだね。今のアルバムが前のより売れていないのが一つでもあるとずっと自信が得られるんだよ。突然レースからおりたり、エレベーターの端に寄りかかると感じる。コンスタントにどんどん上昇していきなきゃいけないと思っていたものが、突然なんでも好きなことができるようになるんだ。そもそもどうして音楽をやらなくてはいけないのか、といったことを考えさせてくれるんだよ」

●あなたの音楽への取り組み方をみると、常に音の素材の新鮮さ、サウンド表現の新鮮さに興味を向いています。ところがここ最近のロック・アーティストの殆どが、表現の新鮮さよりも深さへと比重を変えていますよね。そういう意味であなたのスタンスは非常に突出したものに見えるわけですが、自分自身ではどういう印象を持っているんでしょうか。

「確かにレトロもの、サウンド・レヴェルで昔の音が流れている傾向にはあるよね。もともとその一方で表現が楽々になっているかどうかは知らない。ただ僕も自分の音楽にもっと感情を移入したいと

思っているのは確かさ。つまり歌詞の面で、現実の世界をそのままにしか見ていないというところが、ジーザス・ジョーンズが克服すべき課題だと思うからね。聴き手、送り手共に気持ちのレヴェルではすごくエンターテインメントしていると思うけど、それ以上にはなっていない。この点を是非変えていきたいと思ってるんだ」

●逆に言うと、常にサウンドは新しくなければならぬというような強迫観念じみたものが存在するのではないかと思えるのですが……。

「自分自身については確かにあるね。でも、どっちも立ち止まることなく新しいことを追求していききたいという気持ちは正直なものだし、何かに後ろから押されるようにして、いやいや新鮮さに執着するわけじゃないんだ。だから歌詞はスタイルの新鮮さでなくより深みを加えたいけど、曲はこれからもずっと新しいものを目指すよ。僕はそこに興味を見出しているから、そうしないといけないというプレッシャーも自分自身に確かにかけてる。でもこれはそういう欲求があるからだし、それを放棄したらもはやジーザス・ジョーンズ

の存在理由すらなくなってしまうと思うんだ。いわば、マウンテン・バイクに乗らなくちゃいけないという強迫観念があるとしたら、それは僕がマウンテン・バイクに乗りたいからなのさ」

●その新鮮さということについてはですけど、あなたはザ・ザの「インフェクテッド」にあった生の音とテクノロジー・サウンドの融合のさせ方がひどく気に入って、それを手掛けたウォーン・リヴゼイを「パーヴァース」のプロデューサーに迎えたと言っていましたよね。ところがザ・ザのマット・ジョンソンの指向は、それを押し進めるといふより、徐々にルーツ回帰、即ちブルース的なアプローチをとるようになっていきます。あなたからすれば、そういう路線はやはり後退に映りますか。

「映るね。すごく悲しいよ。マット・ジョンソンが70年代のジョン・ノレンに戻らないといけないなんてね。まあビジネス面に限って言えばずっといいアイデアだとは思いますが、元々の楽曲がいんだから僕があえて彼らを批判することもないだろう。それでも曲の出来としては60%くらいかな。もっと何かが必要だと思う。まあ、発売されたらすぐ買っちゃったけど、『ダスク』は過去のアルバム程創意に富んでないと思うね。だから次のアルバムは、出てすぐには買わないかもしれない。新作がそうだったということもあるけど、もう一つ僕の興味の対象が変わってきたせいもある

。もうロックのレコードは殆ど買わないんだ。正直、ロック・アーティストで好きな人はもういないね」

●あなたの指向からすれば、そうでしょうね。ただ、あなたにとってサウンドの新鮮さというのは、テクノロジーをどれだけ、どのように利用するかという発想と直結していると思います。逆にそこで表現の新鮮さを生み出す安直な方法として、テクノロジーへの依存がむやみと高くなる可能性もあるでしょう？

「ああ勿論さ。チャック・ベリーが50年代のテクノロジーであるエレクトリック・ギターを利用したように、そして後にはジミ・ヘンドリックスがそれを最大限に活用してみせたようにね。僕達は程度の差こそあれみんなテクノロジーに頼っているんだよ。このテープ・レコーダー（注：取材用のもの）にしたってそうだろう？ 結局テクノロジーというものは僕達のアート・フォームの水準を上げるために存在しているんだから、それに頼るのはなんら悪いことじゃないよ」

●確かに同時代を生きた人間の表現の道具として

JESUS JONES

ロックのレコードは殆ど買わないんだ。
好きなロック・アーティストも、もういない

は当然ですけど、人間の本质というのはメンタリティの部分では全く変わりがなかったりするじゃないですか？ 例えば100年前の小説を読んで感動したりするわけでしょう？

「それはそうだけど、昔の小説だって何らかのテクノロジーを利用して書かれたわけだろう？ ただ当時のテクノロジーが今のとは違っていただけでね。ロック・ミュージシャンだけとて、ある時代のテクノロジーの方が他の時代のそれよりも単純に優れていると考えているところに、彼らの大きな間違いがあるんだ。そんなのまったくの見当違いさ。『クロスビート』だって当然コンピューター・テクノロジーに依存している部分があるはずだけど、それが50年前のタイプライターより絶対に優れているとは、言えないよね」

●では、殆どのロック・ミュージシャンは怠慢であるか？

「いや、怠慢だとは思わない。ただ彼らは考え方が徐々に狭まってくるようなアート・フォームの中で育ってきて、それ自体にルールを作ってそれを絶対に破らないようにしているんだよ」

●そして、ミュージシャン達はそのことにすら気がついていないのだから？

「ああ、まったくね。テクノロジーは冷たくて非人間的な音楽を作り上げるんだという神話をみんな信じている。気づいていないからこそ、いつだって僕達がロック・アルバムを作るのにテクノロジーを使い過ぎているという反応が自動的に返ってくるのさ」

●今度U2が出す「ZOOROPA」というアルバムは、今までになくテクノロジーが活用され、しかもボ

マイク・エドワーズ IN & OUT	
IN	OUT
ステレオMC'S	ティーンエイジ・ファンクラブ
デベッシュ・モード	ニルヴァーナ
トム・ウェイツ	プリンス
ニック・ケイヴ	レニー・クラヴィッツ
ヒップホップリシー	ローリング・ストーンズ
ザ・プロディジー	U2

ノはテクノロジーと心中する覚悟すら持つてるようですけど、これはあなたの意見を裏付けるものと思いませんか。

「いや、思わないね。彼らの態度は偽善的だよ。なにしろU2は木村にすくく典型的かつ保守的なロック・バンドだし、アルバムも何ら革新的じゃないからね。ライヴの時に彼らがコンピューターテクノロジーを使いまくってることを僕は知ってるけど、彼らは大衆にはそれを言わずに隠し通してきた。それこそテクノロジーを使ってはいけないという神話の中に彼らもまたいるからなんだよ。U2はすぐにでもギターを投げ捨てた方がいいと思うね」

●だったらなぜジョー・サス・ジョーンズはまだギターを投げ捨てていないんです？

「おっつけやるよ」

●ということは、今いるバンドのメンバーは必要なくなりますね？

「いや、バンドは必要だよ。ロック・ミュージックの総てが古臭くてつまらないわけじゃないしね。テクノ畑の人達も最近気づいてきたことだけど、ロックの一番いいところはライヴ・パフォーマンスなんだ。コンピューターが出す音の他にバンドの人間がステージで実際に音を出すというところがね。だからバンドはこれからも変わりなく重要

な役割を果たしていくよ」

●ただしそれはステージの上でのことでしょうか？ それこそバンドという形態をとりながらも、あなたと周囲をコンピューターで固めてしまうことで代用もできるのではないですか。

「それもやろうと思えばできるよね。でも今ほどエキサイティングなものにはならないよ。だからそれは考えられないな。エキサイティングな3次元的ライヴ体験はできないだろうからね」

●他のメンバーもあなたの意見に完全に同意しているんでしょうか。「パーヴァース」のレコーディング方法についても不満は聞こえてきませんでしたか。

「なかったよ。みんな僕に同意してくれている。どんな社会にもリーダーがいて、それに対抗する者がいて、その他はどうでもいいと思っている人達だ。だから対抗する人間が僕に同意すれば、他の人間についてはそれほど気にはしていないのさ。まあでもこんなこと言うと彼らに対してフェアじゃないな。要するに、テクノがこれからの音楽だということに全く信じていない奴は、このバンドには一人もいないということさ」

●ユニークで強烈な表現のためには、バンドではあっても、アーティストの強いエゴが必要だということですか。

「勿論だよ！ 多少型からはずれた人間、言い換えれば多少メチャクチャな人間こそが、音楽で商業的な成功を収めることができるんだ。これはポップ・ミュージックの歴史が証明してくれていると思うね」

●あなたは「ロック・ミュージックの終わりなきリバイバルizm」という言い方で、ロック・シーン全体の安易な方向性に疑問をぶつけていたけど、これはその時々々の先端にあるサウンドがすぐに古くなっていくことと関係が深いと思うんです。ただ、100年単位で見れば、5年10年毎のリバイバルなど、取るに足らないことになりはしませんか。

「そうだね、ロック自体が古典となる時代も来るだろうから、確かに100年もすればそんなことは大した問題じゃなくなるだろう。古典ということでは、どれもこれも共通することだろうからね。ただ、どっちみち100年前の音楽を好きな人間なんて、ほんの限られた人だけだよ」

●例えばレニー・クラヴィッツなど、あなたから見れば典型的なリバイバル野郎に過ぎないんですけど、彼に言わせるとフォームやスタイルではなく、音の素材そのもののレヴェルで楽器の古いサウンドが好きで、そこには非常なこだわりを持っているわけです。

「うん、それはわかるかどうか知らんスポッターといは歌を通じていくそれって本気で取ってるんだから...」

●あなたが音楽を聞いてないんです「過去を振り返るんぞ出て来るんだから、昔のものを僕にとっての音と...」

●ブライアン・イメに属する音楽を作るために来てるんです「いや、違うね」

●10年後の人間を聞いてもらおうって、しかも手帳は別のものにしようものを僕に...」

●あなたの使ってるのを見て、セザンヌ・ジョーンズでしようの...」

「勿論それはどうせいだけかどうかって新しいキー...」

●あなたの音楽の...」

であると同時に...」

思いますが、テクノ...」

在あなた達を最も...」

取っていいんでし...」

「勿論だよ、身体...」

と、あるいは精神...」

とが重要だけど、...」

PRESEN

JESUS JONES

た人間、言い換
それが、音楽で商
んだ。これはホ
しくてくれる
クの終わりなき
、ロック・シー
つけていました
るサウンドがす
が深いと思うん
たら、5年10年毎
いことになりは
なる時代も来る
そんなことは大
スというこで
らからね。た
好きな人間なん
ど、あなたから
過ぎないんし
ムやスタイルで
て楽器の古い
は非常にこだわ

「うん、それはわかるよ。日本でこういう人達が
いるかどうか知らないけど、イギリスにはトレイ
ンスポッターという人達がいてね、暇をみつけて
は駅を歩いていく車の数を数えているんだよ。
それって本当に取るに足らないことに対するこだ
わりだよ。他の総てを排除してそれだけを見つめ
ているんだから……」

●あなたが音楽をやる時というのは現在と未来し
が混ざっているんですか。

「過去を振り返ることもたまにはあるよ。でもど
んどん出て来る新しいものについていくのがやっ
とだから、昔のものを聴く暇はなかなかないんだ。
僕にとっての昔というのは2ヵ月前のことだよ」

●ブライアン・イーノは現在の音楽ではなく、未
来に属する音楽、未来になって理解され評価され
る音楽を作りたいと言っていました、あなたはそれ
に共鳴できますか。

「いや、違うね。僕には古典を作る気はないから
さ。10年後の人間にジーザス・ジョーンズの音楽
を聴いてもらおうとは思わないね。今のために作
って、しかも手早く作って、それが終わったら今
度は別のものに手をつけるといったポップ感覚と
いうものを僕は信じているんだ」

●あなたの使っているテクノロジーもどんどん進
化するわけで、そうなると思えばジーザス・ジョ
ーンズの音楽もまたどんどん古くなってしま
うのではないですか。

「勿論それはそうさ。でもそれがテクノロジーの
せいだけかどうかははっきりとはわからないな。
だって新しいキーボードが発売されるたびに買う
必要性は感じないからね。既存のテクノロジーで
も使い方が次第で何年かは同時代の表現も可能だ
と思う。でも確かにジーザス・ジョーンズのこれ
までの音楽はどんどん古くなっていったよ。むしろ
そうあるべきなんだ。そういう目的のもとに作
られているとも言えていいくらいさ。だからこそ早
く次のアルバムを作らないといけないんだ。「パー
ヴァース」は僕の頭に突きつけられている拳銃の
ようなものさ！」

●ではあなたの中では「パーヴァース」さえも既
に今を生きていない、という実感があるんですか。
「そうだよ、現在のジーザス・ジョーンズのある
べき姿からは離れていってね」

●あなたの音楽の上で非常に大事なことは現在形
であると同時にエキサイティングであることだと
思いますが、テクノやハウス・サウンドが、今現
在あなた達を最もエキサイトさせるものだと受け
取っていいんでしょうか。

「勿論だよ。身体的にエキサイティングであるこ
と、あるいは精神的にエキサイティングであるこ
とが重要だけど、両方備わっていればなおいいだ

ろうね」

●ただ僕からみれば、その手のダンス・ミュージ
ックは殆どが匿名的で、90%はゴミのようなもの
であって、残る10%の中に優れて個性的なもの
があると思えますね。

「僕だったら同じことをジャズにあてはめるね。
とにかくこれは個人の趣味の問題だから、認識の
違いを争っても平行線を辿るだけだし、凄く退屈
なやりとりで終わっちゃうよ。とにかくそれ以外
のことは言えないし、こうした見方はどんなタイ
プの音楽にも言えることさ。ただ僕が今のロック・
ミュージックを同じ比率で見ていることは間違い
ないね」

●もう一つ疑問に思ったのは、あなたがプリンス
の曲を例に出して、彼の曲は同じ小節が何度も出
てきて、そこにアーティストの怠慢を、そして退
屈さを感じてしまうと発言していましたよね。しか
しポップ・ミュージックの歴史の中には同一フレ
ーズを繰り返すことによって、聴き手の高揚感を
徐々に高めるといふものがあるわけです。そして
それはアフリカ音楽、ミニマル・ミュージック、
あるいは最近のゴエ・ゴエ・ミュージックにもつ
ながっているわけで、同一フレーズの繰り返し
が必ずしも退屈なものであるとも、アーティストの
怠慢とも言い切れないと思うのですが？

「テクノ・ファンの僕としてはその意見に賛成せ
ざるを得ないだろうね。テクノだってアフリカ音
楽といったネイティブの音楽に直結しているから
ね。プリンスのことに関しては、どういった文脈
の中で言ったのか覚えていないから答えようがな
いけど、一つ言いたいのは曲にヴォーカルが入
ると急速に老化していくということなんだ。極端な
く早さで退屈になってしまう。だからヴォ
ーカルが入った曲は、3〜4分以上は聴けないん
だ。ところがヴォーカルなしの曲だったら、15分
でも20分でも聴いていられるんだよ」

●しかしそれはあなたがヴォーカリストであるこ
とに理由があるんじゃないですか。

「違うね。その二つは全く別のことだと思う。も
しろそうだったら、ヴォーカリストである僕はヴォ
ーカル曲の方に興味を示しているはずだろ？ だ
からどうしてかはわからないんだ。これはミュ
ージシャンとしてではなく、音楽ファンとしての見
解だけだね」

●昔の古典的な若者文化の形容に「セックス、ド
ラッグ&ロックンロール」というのがありますが、

今のあなたの考え方からすると、全く違ったもの
が並びそうですね。

「うーん、そうだなあ、ちょっと待ってよ、考え
てみるから……(しばらく考える)……エレクトリ
シティ、ドラッグ&ビデオ・ゲームだな」

●ドラッグだけは変わらないですね。

「僕にとってのドラッグはアルコールだけど、現
実問題としてドラッグがポピュラー・カルチャー
に多大な影響をもたらしたことを無視することは
できないし、それはこれからも変わることか
ないと思う。たとえその使用を認めない人がいたと
しても、特に音楽においては影響力は絶大だよ。ジ
ャズから始まって、ロックンロールへ行くと、サイ
ケデリックからパンクへ行っただけだけど、そ
こにはいつもドラッグが介在していた。僕はその不
利益な部分も知ってるからドラッグをすすめるわ
けじゃないけど、大勢の人が実際にやっているの
を知らないというほど無知じゃないよ。偉大な音
楽を作りあげてきた人の殆どはドラッグにかなり
深く関わってきたんだ」

●では、そろそろ時間もないようなので……。

「ちょっと一言つけ加えたいんだけどいいかな。
あの最初のセット時間の話についてなんだけど、
僕自身よく気に入ったバンドを見に行っても、1
時間もすると完璧に飽きてしまうんだ。そういう
ことからすると、どんなバンドにとっても一番い
いは45分のステージだと思う。だから僕達の1
時間10分のセットも長過ぎると思うんだ。僕がオ
ーディエンスとして見ていると飽きるだろうから
ね。だからもっと長くするなんてよけい間違っ
てるし、ジーザス・ジョーンズの在り方の逆をいく
発想だと思う。自分が耐えられないような長さの
ライブをやるなんてできないからね」

●しかし、CDがLPにとってかわって収録時間は2
倍近く長くなってるじゃないですか。

「確かにそうだけど、でもそれはCDの場合、個人
で好きな曲を選んで、しかも好きなように組み
替えて楽しむことができるからだよ。僕自身CD1枚
をそのまま通して聴くことは殆どないんだ」

●ということは、ミュージシャンがその作品全体
で表現したかったことを聴くというよりは、自分
の気に入った一部分を恣意的に切り取って再編集
して聴いているということですか。

「そういうこと。それがモダン・カルチャーのい
いとこじゃないの？ モダン・ビデオ・カルチ
ャーのさ」

PRESENT!

ジーザス・ジョーンズのメンバー全員のサイン入り①「パーヴァース」ブックレット②プロモーション・フォトのいずれかを、抽選でそれぞれ2名の方にプレゼントします。欲しい方の番号、今回の特集の感想等を書いてハガキで応募して下さい。宛先はクロスビート編集部「Oh, Jesus」係まで。8月18日必着。

ロックのダイナミズムは失なわず

マイク・エドワーズ、抜群のセンスの勝利である。ジーザス・ジョーンズとは何なのか？ それを当事者としても第三者としても十二分に知り尽くしているのだ、この人は。3度目の来日となった今回のライブでは、そんなマイク像が一際浮き彫りになった。硬軟、縦横自在のステージ展開、最新作「パーヴァース」のラスト・ナンバー「イデオット・ステア」を最後に据え、各アルバムの骨格をピックアップした選曲。照明やサンプリングをはじめとするテクノロジーの配置。ノイズを撒き散らす一方で、重くうねるラウド・ギター。これらの中心を貫き通している線が、どんなスタイルになろうと風化しないメロディである。「ライト・ヒア、ライト・ナウ」「リアル・リアル・リアル」等といった楽曲群が、艶やかな色を次々と染めるように放射される。「パーヴァース」の終盤で

描かれた一番新しい色、漆黒も無論焼き付けられたそのステージは、さながらマイク・エドワーズの独壇場だった。

それだけにステージ上で頭を振りまくるアラン・ヤヴォルスキーやキーボードをバンバン叩くようにして弾くイアン・ペイカーにしても、「パーヴァース」同様、以前よりミュージシャンとしての存在感は益々希薄になってはいた。しかし、もともとこのバンド自体メンバー間の激しいせめぎ合いというよりワンマン体制の下に成り立っているものだし、言い方は悪いが他のメンバー全員、マイクの右手、左足となり彼を中心にジーザス・ジョーンズという総体をスケール・アップさせる役をきっちり担っているのだ。それ故ステージがこちんまりとする場面は微塵もなく、逆にこうした図式がくっきり映し出されたのが今回である。

JESUS JONES

極端な話、マイクのヴォーカルを除いては誰がどの音を出しているのかわからない時さえあったが、それがどうしたと擬伏せるように、電子音とバンドが紡ぎ出すグルーブが交錯する。

全てのスタイルが出尽くした今、もう誰もオリジナルにはなれない。これからの音楽は順列組合せによって生まれ得る。帰るべきルーツなどどこにもないし、あるとすれば現在、今の瞬間だけだ。ジーザス・ジョーンズの鮮烈さは、こうした自らの起点を潔く見つめながら、そこから全面展開していったところにあった。

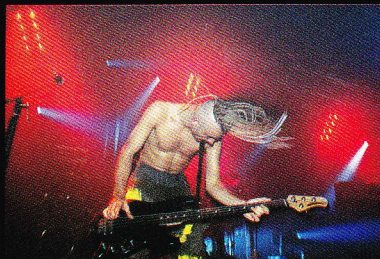
ハウス・ミュージックとの接点を突破口にした「リキダイザー」、スラッシュ〜フォークまであらゆるスタイルレンジを広げた「ダウト」、テ

クノロジーを徹頭徹尾駆使した「パーヴァース」、彼らの軌跡は前作を踏襲することなく過去をなぎ倒し、未来を見据え今と直結していく中での姿を、そのまま曝け出したものだ。前へ、ひたすら前へと、この道程を猛烈なスピードで駆け抜け、突きつめていった結果、テクノロジー化が進むジーザス・ジョーンズをぎりぎりのところでロック・バンドというフォーマットに繋ぎ留め、ダイナミズムを獲得していく。こんな第一期ジーザス・ジョーンズの極限形が今回のステージである。

「90年代っていうのは、ドラム、ギター、ベースだけで素晴らしいロックは作れない」

マイク・エドワーズは今、こう繰り返し唱えているが、さて次はどうなる？ 大谷英之

CROSS LIVE REVIEW



古典的R&Rとテクノロジーの交感

前回の来日公演を見逃しているの、久しぶりのジーザス・ジョーンズ生体験となった。その間にハウス・ミュージックからスラッシュ・メタルまで取り入れた新鋭ロック・バンドは、「ライト・ヒア、ライト・ナウ」を全米大ヒットさせ、グラミーの新人賞を獲得、そしてそのキャリアを自ら嘲笑うかのようなテクノ色の強まった最新作を発表と、何だか忙しい軌跡を辿っている。そして今回の来日は、僕を含めてその新作を肯定した者にとっては至福のレイヴ・パーティを、そして彼らをハウスおたくの戯言ロックと考えてる一部の向きにはその化けの皮をひんむく良い機会、というわけで、注目度の高い大事なライブでは？と意気込んで、会場の簡易保険ホールへと出掛けた(クラブチケットは取れなかったの

さ)。

SEの流れる中、「パーヴァース」からの「ゲット・ア・グッド・シング」でスタートしたステージは意外に暗い。曲間にマイクにピン・スポットが当たり、そこで女の子達の嬌声がかかるのだけど、曲中は全体的に抑え気味でいわゆるロック・ショウ的趣きを拒否したかのような照明に期待が高まった。だが、先にライブの感想を述べてしまうと、残念だが幾つかの問題点があったと言わざるをえない。

まず前回のライブ評でも言及されていたようだが、音の小ささ。筆者の席が端の方だったので、そのせいかもしれないと思うが、ある意味音圧が重要なファクターであるテクノ・サウンドに傾倒してる割には、重いビートの波で有無を言わずそちら側の空

間へ引きずり込むような圧力までは、感じさせてはくれなかった。また以前に比べ、打ち込みへの依存度の高まった新曲と過去のシングル主体の選曲は、バンド側のサービスであったのかもしれないが、打ち込みのハード・ビートとリズム・セクションが絡み合った新曲群に比して、これまでの曲が脆弱に感じられてしまい、個人的には初めて生で聴く名曲「ライト・ヒア」にしても、今一つ盛り上がらなかったのも事実だった。この辺、バンドとしてのジーザス・ジョーンズの弱さを感じ、せめてリズム隊がEMFだったら、等と不埒なことも頭を過ったりした。ただ以上のことをもってこの来日公演を否定するつもりはない。

ハウス等、ダンス・ミュージックの消化と、サンプリングの多用など、テクノロジーの導入により注目されてきた彼らだが、それらを支えてき

たのは逆にある種古典的なメロディックなロックンロール・バンド像だったとも言える。そうした側面から彼らは確実に脱皮を図っていた。サウンド全体はビートに軸が置かれ、ジェリーのギターはほとんどギターらしいフレーズを弾くことはなく、イアンのキーボードと共にサウンドに細やかな起伏を与え、そうした4人の音塊の中でマイクの今まで以上にラフなヴォーカルが浮かび上がる瞬間、スタイリッシュなギター・フレーズを爪弾く瞬間、クラシックなR&Rスタイルとテクノロジーが高い次元で交感し合う幸福な瞬間にゾクとする快感を覚えた。それはまだ発展途上にすぎない。だがマイクの言うロックの進化すべき形へと、バンドが試行錯誤しながらどう変わっていくのか、一つの方向性を提示出来たライブではあったと思う。

横田勇司